

2014年度 国際キャリア開発プログラム「合宿セミナー」

『国際キャリア開発』

テーマ：グローバル時代のキャリア形成を考える

事前学習資料集

- 主催： 大学コンソーシアムとちぎ、宇都宮大学
協力： 白鷗大学
後援： (公社) 栃木県経済同友会、(公財) 栃木県国際交流協会、
いっくら国際文化交流会、JICA 筑波
協賛： (一財) 栃木県青年会館、(公財) あしぎん国際交流財団、
キリンビールマーケティング(株) 栃木支社

国際キャリア開発プログラム委員会 委員長
国際学部国際社会学科 教授

重田 康博



宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ、そして全国の大学生、社会人の皆さん、国際キャリアについて考えたことがありますか。

大学時代に、就職活動に入る前に、国際キャリアのプログラムに参加してみたい、国際的な問題に対応する職場や海外で国際インターンをしてみたい、あるいは今、政府、企業、大学で叫ばれている、「グローバル人材」の育成のためのプログラムに参加してみたいと思う方がいるかもしれません。

そのように考えている皆さんのニーズに応えるのが、グローバルマインドを養う「国際キャリア開発プログラム」です。本プログラムは、宇都宮大学国際学部や栃木県の大学が中心になって 2004 年から毎年実施され、参加者数は過去 10 年間合計 1150 名（宇都宮大学で 495 名、他大学等で 655 名）となっています。

このプログラムの科目は、学生が働く意味やキャリア教育について考える「国際キャリア開発」、英語で全て授業を行う「国際実務英語」、国内や海外の企業、公的機関、NGO・NPO でインターンシップを行う「国際キャリア実習」の 3 科目、6 単位で構成されています。いずれも夏季と春季の休業期間に行い、講義は 1 科目 2 泊 3 泊の集中合宿方式で、キャリア実習は 80 時間で行います。本年度からは、新たに共通テーマを「グローバル化時代の地域とキャリア」とし、「地域からのグローバル化(Globalization)」、「地域のグローバル化(Glocalization)」の 2 つの柱を立て、国際ビジネス、国際協力・国際貢献、多文化共生と日本、異文化理解・コミュニケーションの 4 つのテーマで分科会を構成します。講義ではその道のプロの専門家や講師を揃え、実習では国内・海外で魅力的で個性的な研修先を用意しています。3 科目すべての実習を勧めますが、選択的な受講も可能です。

「国際キャリア開発プログラム」は、毎年宇都宮市や栃木県内だけでなく、全国から大学生、社会人が多数参加します。皆さんもこのプログラムに参加して、国際キャリアについて一緒に学び、国際社会や地域社会への「キャリアパス」の可能性を探っていきましょう。

最後に、本プログラムは、大学コンソーシアムとちぎとの共同事業として企画しましたが、その実施に際しましては、白鷗大学からご協力をいただいたほか、(公社)栃木県経済同友会、(公財)栃木県国際交流協会、いっくら国際文化交流会、そして、JICA 筑波からご後援をいただきました。また、(一財)栃木県青年会館、(公財)あしぎん国際交流財団、そして、キリンビールマーケティング(株)栃木支社からはご協賛をいただきました。ご関係の皆様からの多大なご理解とご支援に対し、主催者を代表して、厚くお礼申し上げます。

●実施要領

- 1) 科目名： 国際キャリア開発～2014年合宿セミナー～
- 2) テーマ： グローバル時代のキャリア形成を考える
- 3) 日程： 2014年8月9日（土）～2014年8月11日（月）＜2泊3日＞
- 4) 会場・宿泊： コンセーレ（栃木県青年会館）
＜所在地＞〒320-0066 宇都宮市駒生1丁目1番6号
＜問合せ＞TEL: 028-624-1417
＜MAP＞ <http://www2.ocn.ne.jp/~concere/access.html>
- 5) プログラム： 2頁を参照
- 6) 参加定員： 60名
- 7) 参加費： 10,000円（食費・宿泊費を含む）
- 8) 問合せ： 宇都宮大学国際学部
＜所在地＞〒321-8505 宇都宮市峰町350
＜問合せ＞TEL: 028-649-5172 FAX: 028-649-5171
E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

●プログラム（敬称略）

1日目（8月9日 土曜日）

時 間	内 容
09:00～09:30	受付
09:30～09:45	開講式・オリエンテーション
09:50～12:00	全体会（全体講義・ワークショップ）
12:00～12:50	昼食
13:00～13:20	趣旨説明（分科会および全体発表のプレゼン方法の説明など）
13:20～15:20	パネルトーク「グローバル時代におけるキャリア形成について」
15:50～17:50	分科会 1 分科会「国際ビジネス A」講師：益子博美 分科会「国際ビジネス B」講師：栗田政彦 分科会「国際協力・国際貢献 C」講師：湯本浩之 分科会「国際協力・国際貢献 D」講師：近藤光 分科会「多文化共生と日本 E」講師：若林秀樹 分科会「異文化理解・コミュニケーション F」講師：日下田正
17:50～18:30	チェックイン（事務局担当者より鍵を受領）
18:30～20:00	夕食・交流会

2日目（8月10日 日曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
08:30～12:00	分科会 2
12:00～12:50	昼食
13:00～15:30	分科会 3
15:30～17:30	分科会 4（分科会まとめ・中間発表準備）
17:30～18:30	中間発表
18:30～19:30	夕食
19:30～21:30	全体発表準備

3日目（8月11日 月曜日）

時 間	内 容
07:30～08:20	朝食
09:00～10:00	発表準備
10:00～12:20	全体発表
12:20～13:10	昼食
13:20～15:00	振り返り／意見交換／全体総括／アンケート記入
15:00～15:15	閉講式
15:30～	バスで宇都宮駅・宇大に移動・解散（現地解散も可）

今求められるグローバル人材とは？

☆講師プロフィール

氏名：田巻 松雄（たまき まつお）

所属：宇都宮大学国際学部長

略歴：

1956年生まれ。宇都宮大学国際学部長。筑波大学大学院社会科学研究所修了。社会学博士。1996年より宇都宮大学国際学部に勤務。2008年、国際学部が地域の国際化を推進する教育研究拠点として開設した多文化公共圏センターの初代センター長に就任。現在、外国人児童生徒支援を目的とする宇都宮大学 HANDS プロジェクト研究代表を務める。



全体講義の概要

「地域のグローバル化」と「地域からのグローバル化」に対応する「グローバル人材」育成の意義と課題をキャリアという視点に引き付けてお話しします。

感動を贈ろう！～世界に一つだけのギフトを作ろう～

☆講師プロフィール

氏名：益子 博美（ますこ ひろみ）

所属：株式会社花のギフト社 取締役ジェネラルマネージャー

略歴：

日本フローリスト養成学校卒業後、渡米。オクラホマ州の生花店に勤務し、アメリカのギフト（フラワーバルーンや Xmas 装飾等）に触れた。

帰国後は、老舗「花重」でフローリストとしての経験を積みながら、故・関江重三郎先生のアシスタントとしてアジア各地を訪問（フラワーデザインレッスンの為）。また、日本フローリスト養成学校でアシスタントも務め、講師としての経験も積む。25歳の時、渡豪。オーストラリアのワイルドフラワーに触れ、自然の花の美しさを学ぶ。



帰国後、フラワデザイナーとして雑誌やメディアの仕事をこなす傍ら、2001年、AIFDの資格を取得。2002年には、銀座にフラワースクール兼ショップ「ateria Masubo」をオープン。現在は、(株)花のギフト社で、取締役ジェネラルマネージャー兼チーフデザイナーとして、数々の商品を提案し、各社・お客様へ販売している。

1. 仕事の内容・研究テーマ

我社は、お花を中心にしたオリジナルギフト商品を作り、B to B や B to C、色々なお客様に販売し、様々なシーンで活用いただいています。

ギフト商品に思いを託されるお客様の期待に応えるよう、喜ばれるギフトを考えて作ってみましょう。「感動を贈る。」感動をお届け出来る商品とは？そして、その商品をどう市場に送り、販売し、購入されて利益を出すか。売れる商品を作る。簡単そうですが、これがなかなか難しい。でも、売れたらとても面白い！

お客様をあっと言わせることが出来るのか。世界で売れるナンバーワン・オンリーワンギフトを考え作りましょう！貴方の考えた商品が本物の商品になるかも？

2. キャリアパス

高校卒業後、働きながら花の専門学校へ行く。卒業後、20歳の時渡米しオクラホマ州のお花屋さんで半年間働く。日本とアメリカの違いに度々驚き、多くの刺激と感動を受けて帰国。帰国後、日本で戦後フラワーデザインを広めたデザイナーの一人に師事。その師のアシスタントとして、アジア各地を訪問。日本とアジア各国の違いに衝撃を受けた。花の学校のアシスタントとしては、年に2回あった来訪した欧米フラワーデザイナー達の、デモンストレーションやレッスンのアシスタントをしたりした。大きな会場でのデモンストレーションの準備や外国人デザイナーの接待を通し、多くのことを学んだ。

25歳の時、もう少し英語に触れたいという理由で、ワーキングホリデービザを取り渡豪。花関係だけでなく、色々仕事をした。一番印象に残っているのは、遠洋漁業に日本から来たマグロ船の船員さん達に、お土産品を売る仕事だった。ワイルドな環境で過ごした時期もあり、生き抜くということを考えてこともあった。

帰国後は独立することを考え、がむしゃらに働いた。様々な方のおかげで、31歳の時、銀座5丁目に自分のショップをオープンした。ちょうどこの頃、今の栴花のギフト社社長の野上耕作氏に会い、当時「一流のデザイナーになる」ことが夢だった私に、「君の夢は小さい。僕だったら、一流のデザイナーを何人も雇える経営者になる」と言われ、衝撃を受け、銀座のショップはスタッフに任せ、栴花のギフト社に入社した。栴花のギフト社は小さな会社だが取引先が全国にあり、やりがいのある毎日を送っている。現在、栴花のギフト社が考えたオリジナル商品が各社で幾つも販売されている。今後もお客様をあっと言わせる商品作りをしていきたい。

追伸：2001年にAIFDの資格を取得、AIFDとは…

American Institute of Floral Designereの略 アメリカの花業界でもっとも権威のあるフローラルデザイナー協会のこと。その協会の認定試験に合格したデザイナーのみ名乗れる称号。アメリカのフラワーデザイン界では一流の称号。現在日本では約40名のフラワーデザイナーが資格を取得しています。

3. 分科会の内容

国によってフラワーギフトの形は色々。ギフトの習慣も違います。例えば、病気の方に鉢植え植物を贈らない(根が付いているので、寝付くと言われ、縁起が悪いとされています)のは、日本だけです。他の国では、鉢植え植物は長持ちするので、病気のお見舞いに喜ばれます。欧米人は開いたバラの花をゴージャス言って喜んで買いますが、日本人は蕾のバラが好きです。というように、ギフトの形は色々。しかし、自分の思いをギフトに託すことは万国共通。世界にはどんなギフトやギフトを贈る習慣があるのかを調べ、それらのギフトを超えるギフトを考えてみます。世界中の人々に喜ばれるギフト、ナンバーワンギフト、オンリーワンギフトを作ってみましょう。

4. キーワードリスト

B to B、B to C、日本の行事、世界の行事、バレンタインギフト、Kawaii

5. 参考資料等

- www.1800flowers.com ← 世界で一番売れているフラワーギフトのサイトです。日本のフラワーギフトのサイトと比較してみても？
- www.momastore.jp ← NY近代美術館のオンラインストア、参考になるかも

6. 事前予習資料

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 株式会社花のギフト社のカタログ

グローバル化の中での生き方（Life Career）を考える

☆講師プロフィール

氏名：栗田 政彦（くりた まさひこ）

所属：Hikokuri International Associates 代表

一般財団法人日伯経済文化協会(ANBEC)専務理事

略歴：

1944 年生まれ。栗田工業株式会社入社後、アジア太平洋地域および南米・ブラジル地域での事業・法人経営、経営企画室連結経営部門統括、同社監査役を経て現職。海外事業ならびに連結経営企業価値向上における経営およびコーポレートガバナンスを軸としての Career(Professional)。共著に「実業家とブラジル移住」。慶應義塾大学経済学部卒業。

資格：経営士



1. 仕事の内容・研究テーマ

- 日本企業のコーポレートガバナンス及び特にブラジルを中心とした海外事業に関するコンサルタント。前者は日本でのそれは不祥事への対応として論議されることが主流であるが、資本と経営の観点を軸に適切な企業機関運営とリスクマネジメント意識向上を目指す。後者は、事業や本社経営についてのアドバイス。単にグローバルと云う言葉だけで海外進出の傾向も見られる。実態はコスト削減のみの意識を問題視。
- 社会貢献活動として在日ブラジル人コミュニティ支援（特に教育・職育、健康管理）。人口減少化問題で日本は受移民の国とならざるを得ない。支援と云うよりも、この国また地域が異質をどのように受け入れる（内なるグローバル化）かあるいは多様性への感性をどのように磨くかを活動を通じて主張している。
- 研究活動としては戦前の実業家平生 三郎の民間外交を軸としての実業家と公益および日本の近代化課程での移民史とその背景研究（昭和前期と現在の類似性に注目した観点）。甲南大学および筑波大学での非常勤講師。

2. キャリアパス

- 大学卒業後より 4 5 年間同一企業での勤務。新入社員直後の国内での二年間の支店での営業マンとしての出発。自社の商品サービスに惚れる、商品説明よりまず自分が信頼されることの重要性に気付く。
- 会社の将来の海外市場進出を夢見て、「輸出」推進のグループと課の創設に参画。当時メーカーとしては、数少ない直接輸出業務推進と市場開拓のための駐在所をフィリピンに開設 5 年駐在。
- 本社海外部門でオーストラリアでの市場調査開拓の長期出張、合弁設立ほか法人業務。東南アジアへの輸出拡大への営業・技術サービス業務。日本での拠点製造と輸出市場拡大推進の時代（商品サービスでの国際競争（欧米会社））
- ブラジルほか南米市場調査と開拓。ブラジル法人、メキシコ法人等設立と事業活動と企業経営。欧米企業との現地化・現地法人経営での競争の時代。東南アジア等での現地法人設立と経営指導および市場開拓。（現地法人を軸として海外展開と海外現地法人間の連携の時代）

- 本社経営企画部門での国内外企業連結経営推進と企業価値向上に向けたグループ経営推進。(資本市場と製品市場等の市場経済を強く意識させられる企業経営の時代。欧米に遅れること 20 年の M & A の時代)
- 監査役として社内や異業種研究会での活動。会社機関 (取締役会ほか) の本来目的の運営復帰への取り組みや経営効率あるいは企業の社会的意義への論議の活発化への活動。会社法大改正など欧米式企業統治や金融資本グローバル化での市場と企業直結する経営の時代。

3. 分科会の内容

言葉は 1990 年以降に欧米発として発信され、政治、経済、社会、文化のあらゆる分野でグローバル化 (Globalization) として 2000 年半ばから日本でも氾濫した言葉であるが適切な日本語翻訳されていない言葉の一つである。近年においては、言葉として余り紙面を飾ることは少ない。ある意味ではブームが過ぎた言葉であるが、日本では言葉の定義が共有されないまま着実にその変化の中で時代が進んでいる。多くはその対応への How to 論ばかりが目立つ。言葉のコンセプトをしっかりと自分のものとして、「自分すなわち個」をそのコンセプトの中において見ることが大切であると思料する。

グローバル化 (Globalization) とは何か、国際化との違いは。その定義あるいはイメージを自分なりに整理する。また、国際ビジネスというコンセプトと国内ビジネスというコンセプトは大きな違いがあるか。違いがあるとすれば大きな違いは何か等を、議論を通じてまとめる。「グローバル時代のキャリア形成を考える」という本プログラムにおいて、「生業」の選び方よりもグローバル化時代で自分の人生の折々で何が大切かの考察に役立つ事を期待します。そのためには正解はないが、着実に変化が感じられる「グローバル化」の概念を他の人と徹底的に論議してそれに向けて、現時点で自分がなすべきことへのヒントが探せることを目指します。

分科会の進め方は、概念を討議する為の短時間の導入講義のあとにグループ討議を中心に個々のイメージの整理とそれに対応する今の自分がなすべき方向等をまとめる。

4. キーワードリスト

「異質」「多様性」「個」「関係性」「統括統率」

5. 参考資料等

- 「グローバリゼーションの時代」(ヘルムート・シュミット、集英社 2000 年)
- 「市場対国家」上下 (ダニエル・ヤーギン & ジョセフ・スタニスロー、日経ビジネス文庫 2001 年、日本経済新聞社 1998 年)
- 「フラット化する世界」上下 (トーマス・フリードマン、日本経済新聞社 2006 年)
- 「実業家と移住」(栗田政彦共著、不二出版 21012 年)

6. 事前予習資料

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 日本経済新聞：6 月 1 日一面記事「革新力」、6 月 3 日一面記事「起業・廃業に低利融資」「革新力」

何のための国際協力：“援助”の功罪と“寄付”の是非を考える

☆講師プロフィール

氏名：湯本 浩之（ゆもと ひろゆき）

所属：宇都宮大学

留学生・国際交流センター 准教授

略歴：

大学卒業後に在中央アフリカ共和国日本大使館に在外公館

派遣員として2年間在勤。帰国後、NGO活動推進センター

事務局次長、開発教育協会事務局長、立教大学文学部特任准教授などを経て、現職。



1. 仕事の内容・研究テーマ

「開発教育」って聞いたことがあるでしょうか。「教育」とは言っても、学校の授業の中で行われてきたものではないので、聞いたことのある人は少ないでしょう。私がこの言葉に出会ったのは、今から20数年も前のことになります。以来、市民組織（NGO/NPO）の専従スタッフとして、市民による国際協力活動や「開発教育」と呼ばれる教育活動の普及推進を長く仕事としてきました。そのため「ご専門は何ですか？」と問われれば、「国際教育論（開発教育やグローバル教育）」や「市民組織論（NGO/NPO やボランティア活動）」と答えるようにしています。

私にとっては、いわばライフワークとも言える「開発教育」ですが、もともとは1970年代に欧米で始まった教育活動です。その当時“第三世界”と呼ばれていたアジアやアフリカなどの「南」の国々や地域では、多くの人々が深刻な飢餓や貧困に苦しんでおり、各国の政府やNGO、そして国連などの国際機関が国際協力に取り組んでいました。ところが、一部の国連機関や欧米のNGOが、ただ海外に援助金や援助物資を送るだけでなく、「南」の過酷な現状や問題を“援助する側”にいる欧米諸国の人々に伝え、国際協力や国際貢献のあるべき姿を考えていくための活動を始めたのです。こうした活動がやがて様々な教育現場でも行われ、「開発教育」と呼ばれるようになったのです。

研究テーマとしては、英国を中心とする欧州における開発教育やグローバル教育の歴史研究や政策研究のほか、これら教育実践の中で重視される「参加型学習」と、住民主体のコミュニティ開発の現場で注目される「参加型開発」との比較研究を試みています。今日、日本の教育や学校・大学のあり方がますます厳しく問われるようになってきています。伝統的な教育学や教育制度の枠組みの外で研究や実践が進められてきた「開発教育」や「参加型学習」の知見や経験の中に、今後の教育改革や学校・大学改革に向けたヒントを見つけないと考えています。

2. キャリアパス

今でこそ大学に職を得ている私ですが、初めから大学教員を目指していたわけではありません。過去20数年余り、市民組織（NGO/NPO）の職員や役員として仕事をしてきましたが、そこでの実務や実践の延長線上に今の私があります。現在に至るまでの私のキャリアを紹介します。

<1980年代：20代>

英語の教員を志望して某大学の英文学科に一浪の末に入学。ある青少年団体でのボランティア活動に没頭。小中高生を対象に、夏休みは海や山での野外キャンプ、冬休みと春休みはスキー・キャンプなどを企画運営。大学4年の夏から1年間休学。ある民間団体を通じて、米国オハイオ州に派遣。現地のキャンプ場でボランティア・スタッフとして活動。

大学卒業後、外務省在外公館派遣員として、在中央アフリカ共和国日本大使館に2年間在勤。最貧国の過酷な社会状況や日本のODA（政府開発援助）の現実を目の当たりにする。

帰国後、再就職のためJICA（当時の国際協力事業団）の中途採用や某NGOの海外駐在員に応募するも不採用。しかし、ある1本の電話がきっかけとなりNGOの世界に足を踏み入れる。

<1990年代：30代>

当時のNGO活動推進センター（現在のNPO法人国際協力NGOセンター）で、調査研究や政策提言、国際会議や「全国NGOの集い」、職員研修や市民講座、広報やマスコミ対応などを担当。1996年、NGOの立場から教育に関わりたいと当時の開発教育協議会（現在のNPO法人開発教育協会）へ転職。政策提言や調査研究、教材開発や各種研修などを担当。国際協力や国際理解をテーマとする研修会や市民講座の講師として、全国各地を飛び回る。

<2000年代：40代>

NPO法人の事務局長としてマネジメント業務に追われる一方、大学・大学院から「NGO/NPO」や「ボランティア」、あるいは「開発教育」や「総合的学習」などをテーマとした非常勤講師の依頼が増加。大学教育における開発教育や参加型学習の可能性に関心が募る。大学院に入学し教育学を専攻。博士課程を中退して、立教大学の特任教員（5年契約）に採用される。

<2010年代：50代>

宇都宮大学に着任。基盤教育科目「ワークショップで学ぶ変わりゆく現代社会と私たち」、国際学部専門科目「グローバル教育論」のほか、「国際キャリア開発」や「国際キャリア実習」などを担当することに。

3. 分科会の内容

最近では、国際協力に関わる市民組織（NGO/NPO）の活動に参加する学生や社会人が少なくありません。将来、国連機関や政府機関で国際協力に関わりたいと考えている人もいるでしょう。しかし、気候風土や生活様式をはじめ、言語や宗教、価値観や人生観などを異にする人々とともに、私たちが活動することは決して容易なことではありません。海外の現場では、日本社会での常識や通念が覆されるのはもちろん、“援助する側”の善意や熱意が逆効果を生んでしまうことすら起こりえます。国際協力や国際貢献の必要性を語ることは簡単ですが、過去の歴史を振り返れば、“援助”の功罪や“寄付”の是非が議論されてきました。

この分科会では、このような問題意識から出発して、国際協力や国際貢献、“援助”や“寄付”をめぐる問題点や課題に着目しながら、今後この分野に関わっていく上での各自のキ

キャリア形成の課題について検討したいと思います。分科会の進行は、概ね以下の通りです。

- 分科会 1 : 参加者の自己紹介や問題意識の共有。
ワークショップ 1 「“援助”する前に考えよう！(1)」
- 分科会 2 : ワークショップ 2 「“援助”する前に考えよう！(2)」
ワークショップ 3 「される側から見たボランティア」
- 分科会 3 : ワークショップ 4 「私にできること、したいこと」
- 分科会 4 : 中間発表準備

※ワークショップの進捗状況によって、内容を一部変更する場合があります。

4. キーワードリスト

- 1) ODAとNGO
- 2) 国際協力と開発教育
- 3) 参加型開発と参加型学習

5. 参考資料等

日本の国際協力や国際交流の現状や課題を概観し、これらの分野を担ってきた関係者の体験や今後の人材への期待や課題を紹介した入門書として、毛受敏浩・榎田勝利・有田典代監修の「国際交流・協力活動入門講座Ⅰ～Ⅳ」（発行：明石書店）を紹介します。

第Ⅰ集『草の根の国際交流と国際協力』（2003年）

第Ⅱ集『国際交流の組織運営とネットワーク』（2004年）

第Ⅲ集『国際交流・国際協力の実践者たち』（2006年）

第Ⅳ集『「多文化パワー社会」：多文化共生を超えて』（2007年）

6. 事前予習資料

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 湯本浩之「NGO/NPO で働くということ：知ったことを伝えるために」有田典代編著『国際交流・協力活動入門講座Ⅲ：国際交流・国際協力の実践者たち』明石書店、2006年、pp.175-194。

「現場」とはなにか？国際協力という仕事について考える

☆講師プロフィール

氏名：近藤 光（こんどう あきら）

所属：特定非営利活動法人 ACE

子ども支援事業担当（ガーナ事業担当）

略歴：

名古屋大学大学院国際開発研究科修了（学術修士）後、青年海外協力隊（村落開発普及員、ガーナ・ウガンダ）にて参加型開発、保健衛生にかかる活動を行う。その後社団法人国際農林業協働協会にて嘱託職員として、「アフガニスタン国国立農業試験場再建計画プロジェクト（JICA との業務実施契約）」の業務調整、国内支援の業務にかかわる。同嘱託終了後、株式会社オリ



エンタルコンサルタンツが受注する「ウガンダ国第二ナイル架橋詳細設計案件」の業務調整員として 1 年間同プロジェクトにかかわる。その後 2012 年 4 月より現職。おもな担当はガーナのカカオ生産地域における児童労働撤廃のためのプロジェクト（スマイルガーナプロジェクト）の運営管理の他、学校などでの講演・啓発、政府などへの政策提言（アドボカシー）にもかかわる。2014 年 3 月より NGO ネットワーク組織「市民ネットワーク for TICAD（アフリカ開発会議）」の世話人を務める。

1. 仕事の内容・研究テーマ

学生時代は「アフリカ政治」「途上国における民主化」「国際関係」を専門とし、「ナイジェリアの民主化と国際関係」をテーマとした修士論文を作成しました。その後実務や現場経験を通じ、「村落開発」「開発プロジェクト業務調整」「開発プロジェクト管理」などの業務を行ってきました。現在は「児童労働を無くす」ための「プロジェクト管理」のほかに、支援者への報告、学生・市民への講演、ファンドレイジング（資金獲得）、政府等へのアドボカシー（政策提言）活動なども行っています。さらには「人権」「ガバナンス」「フェアトレード」「エシカル商品」「人間の安全保障」などに関心を持ち始めています。

2. キャリアパス

実は私は新卒ですんなり就職できたわけではありません。留年し、内定が取り消され、結局そのあとは「放浪」するように NGO のインターンと大学院進学、また NGO のインターンをしまして、30 歳になってようやくそれらしいキャリアが始まりました。

青年海外協力隊時代（2004 年～2007 年）

1) ガーナ・村落開発普及員（2 年間）

初めて「現場」見たのがこれ。正直「成果」というものはほとんどない。現地の人々と同じ事務所で、人々が暮らしている場所を「じかに」「長期間」目と肌で感じたことが最大の収穫であった。ただし「おれはもうアフリカのことはなんでもわかっている」と勘違いしてしまった。それがのちに大きなしっぺ返しを食らうこととなる。

2) ウガンダ・村落開発普及員（2 年間）

「経験者」として2回目の協力隊に参加したが、実際には経験を生かすどころかさらなる失敗を重ねてしまった。現場というものがいかに「局部的」で、決して「現地の人々以上に分かることはない」ことを強く実感した。同時に「謙虚さ」というものがいかに大切かを実感した。

開発コンサルタント時代（2008年～2011年）

1) 公益法人（農業関係）：業務調整/国内支援・アフガニスタン
人生で初めて雇用保険・厚生年金を受ける仕事はこれ。アフガニスタンで農業関係のプロジェクト。「報告書作成」「機材調達」「精算報告」など、さまざまな国際協力の「雑務」を経験する。また1ヶ月間における現地滞在中、「紛争地帯」における業務（安全対策等）を経験する。

2) 土木コンサルタント会社 業務調整/現地駐在 ウガンダ
橋の設計にかかるプロジェクトの業務調整。唯一の「民間株式会社」での業務経験。ウガンダの政府担当者とのやり取りを通じ、アフリカの政府や行政関係者との仕事とは何かを経験する。またアフリカでの事務作業や行政手続きなど、途上国の行政システムの現実を垣間見る。

NGO職員時代（2012年～現在）

1) 特定非営利活動法人 ACE 国際協力事業担当（ガーナ事業担当）
1年に3回、2~3週間ずつの日程でガーナのプロジェクト地を訪問し、モニタリングやカウンターパート団体と協議を行う。また日本の支援者への報告のため撮影や下地の人々へのインタビューを行う。この経験を通じ、草の根に人々や政府・行政関係者とは異なる開発協力業務従事者と交流するようになり、多くのことを学ぶ。とはいえまだまだ自分自身「効果的な仕事」ができるには至っていない・・・

3. 分科会の内容

この講義を受ける学生の方の中には、いわゆる「国際関係」や「国際協力」の分野で働くことを希望されている方が多いと考えています。そのような方を対象とし、このような分野で働くためのアフリカ・またはその他開発協力の「現場」について考えたいとおもっています（特に私は「失敗経験」のほうが多いため、ぜひ反面教師にさせていただければ幸いです）。また実際に現在関わっているアフリカの児童労働問題を通じ、アフリカにおけるプロジェクトの運営とその課題について、議論を重ねられればとおもっています。

国際開発の現場は様々で、政府を相手にするものから市民を相手にするものもあります。それぞれの特性、利点、課題を洗い出し、学生の皆さんと考え、みなさんのキャリア形成の参考にしていただければ幸いです。

4. キーワードリスト

国際協力、現場、実務経験、NGO、ODA

5. 参考資料等

特に読むことは必須ではありません。もしご興味がありましたら、下記の書籍を読んでいただけるといいかもしれません。ただし、あくまで「参考」です。

① 「ODA 援助の現実」 鷺見一夫（1989 年）岩波書店

② 「開発調査という名の仕掛け」 橋本強司 （2008 年）創成社

上記の二冊は、それぞれ日本の ODA、開発援助について、まったく異なる視点で書いておられます。この二つを読み比べてみると、今後のキャリア形成を考える上での一助となるかもしれません。

③ 「わたし 8 歳、カカオ畑で働き続けて一児童労働者と呼ばれる 2 億 18000 万人の子どもたち」 岩附由香、白木朋子、水寄僚子 （2007 年）合同出版

当団体の代表、事務局長がそれぞれ執筆しています。今回の講義と直接関係しているわけではないですが、現在私が活動している仕事を理解していただくにはこれが一番いいと思います。

④ 「ルガ資源大陸アフリカ―暴力が生み出す紛争と繁栄」 白戸圭一 （2012 年）朝日文庫

私がこれまで呼んだ「アフリカの現場」について書かれた本の中で、一番面白く、わかりやすい本だと思っています。

外国人生徒から教えられたこと

☆講師プロフィール

氏名：若林 秀樹（わかやばし ひでき）

所属：宇都宮大学 国際学部 特任准教授

略歴：

1962年生。栃木県公立中学校教諭24年間の後半15年間は外国人児童生徒教育に携わる。外国人児童生徒教育分野での支援者ネットワーク構築、初期指導教室設置などソリューションの提案、不就学対策などの活動に傾倒。2005年より宇都宮大学重点推進研究「外国人の子どもたちの教育・生活環境をめぐる問題」に関わり、2008年より「外国語特別講義Iポルトガル語非常勤講師」を経て、2010年4月より現職。1997年4月から2011年3月まで栃木県警民間通訳人（英語、ポルトガル語、スペイン語）。著書は『教員必携 外国につながる子どもの教育』シリーズ（宇都宮大学 HANDS プロジェクト刊）ほか。



1. 仕事の内容・研究テーマ

日本には、日本語の力が十分でなかったり、発達段階に必要な支援が受けられなかったりしたことが原因で、高校進学をはじめ自分のキャリア形成が阻まれている外国人の子どもが多く存在します。かれらが希望ある将来に向けて歩むために必要な取り組みは、大きく分けて次の3つがあると考えています。

- ① 進学に関する情報や学習教材・資料の提供など、子どもや保護者を直接支援する取り組み
- ② 学校教員のスキルアップや、行政の制度改革など子どもを取り巻く環境整備に関する取り組み
- ③ 一般社会に外国人児童生徒教育問題を伝え、多文化共生社会の構築に貢献するための取り組み

私は宇都宮大学国際学部にも所属し、外国人児童生徒の教育問題に取り組んでいます。一言で外国人児童生徒の教育問題と言っても様々ですが、公立中学校教諭として長年勤務したことを生かし、主に小中学校現場における諸問題に対する取り組みや、教員同士のネットワークづくりを通じた情報提供などに活動の重点を置いています。「学校現場」やそれを取り巻く教育行政は地域によって特色があり、それに伴い情報の伝え方やネットワークづくりにも理解と工夫が必要となります。あっという間に成長する子ども達に対して手遅れにならないように、経験を生かして取り組む場面がたくさんあると感じています。

外国人児童生徒教育問題が取り上げられて20年以上が過ぎ、現場の状況や社会の認識も様変わりしてきました。これからも効果的な実践を行うためには、経験に甘んじることなく、自分自身もスキルアップに励まなければならないという緊張感を常に感じています。

2. キャリアパス

大学では英文学を専攻し結果的には教員免許も取得しましたが、大学時代の私の頭の中は「音楽」のことでいっぱいでした。当時はまさに怖い物無しで「音楽で世の中を変えてやる」などと考えていました。レコード会社と関係を作って「次代を担う作曲家」を気取り、大学へもろくに通わない生活が2～3年続きました。留年の末「一応自分で生計立てなきゃ」と考え直して地元の教員採用試験を受験、折しも時代はバブル前夜で世のエリートは大企業に流れ、私のような者も教員試験に一発合格となり、「とりあえず」の感覚でスタートしたのが中学校教員としてのキャリアでした。

そんな私にとって中学校教員としての生活は、肉体的にはもちろんのこと「精神的」にも厳しいものでした。常に「集団」を重んじる風潮や、「少数派」を認める意識の弱い（と思える）体質に激しい反感をおぼえ、できる限りそんな空気に反発しました。「変わり者」のレッテルを貼られ、久しぶりに会った同期の教員からは、「あれ、まだ(教員)やってたの？」などと本気で言われました。当然、生徒や保護者からの好き嫌いも真二つに分かれ、一般的に言う「イイ先生」にはほど遠かったと思います。

しかし、「キッカケ」は音もなく表れ、私は気付かぬうちそれに身体ごと飲み込まれることになります。勤務する地域に外国人が急増し、私が外国人児童生徒教育という分野に接したのは教員10年目でした。新分野というのは人に指図されず創意工夫ができるのが魅力でしたが、私の心を捉えたのは親に連れられて日本という異国で生きることになった子どもたちが、必死になって自分探しをする姿でした。それからの私は、専門知識の吸収と目の前の子どもを支援することに没頭しました。それまで教員として関わった方々には申し訳ないのですが、この時初めて「仕事が楽しい」と思うことができ、教員になった自分自身をようやく肯定することができました。

大学時代は就学態度の悪さから大学事務局から何度も呼び出され、「あなたのような学生は退学してほしい」と言われていました。そのような私が、正規教員ではないとしても、大学で仕事をしている現実は不思議でなりません。しかし、落ち着いて振り返ってみると、キャリアの積み重ねに「偶然」など存在せず、音楽をやめて地元に戻ったことも、とりあえず教員になったことも、中学校という体制に反発しながらも仕事を続けたことも、全てが「必然」として「今」につながっていることがハッキリとわかります。

「就活」という言葉が当たり前になってもう何年が経つのでしょうか。物事はやがて日常化し「略語化」されることにより、人々はそのオリジナルな本質を見失ってしまうのではないかと危惧しています。一人一人の人生のキャリアには、社名などのブランドや収入では飾れない大切な要素がたくさん詰まっているはずです。私が外国人の子どもに接し初めて自分を肯定できたように、誰もがそれぞれの「必然」に導かれ、誰にも真似できないキャリアを形成できるはずだと思っています。宇宙から見れば小さな事ですが、「自分」という小宇宙を作り上げる楽しさは一人一人の中に潜在しているはずです。

分科会では、「就活」という言葉が一人歩きしている現代において、「自分探し」や「幸せ」とは何なのか、目まぐるしくグローバル化する私たちの身の回りや、日本を故郷に選んでやってくる外国人の意識や物の見方などに触れ、皆さんと一緒に考えたいと思います。

3. 分科会の内容

〈テーマの概要〉

- 日本における外国人及び外国人児童生徒の現状を把握し課題意識を持つ。
- 「身近なグローバル化」が進むなかで私たちはどう生きるべきか考える。
- 多様化・多文化化する現代社会における職業観や人生観について議論する。

〈テーマの背景にある問題意識〉

外国人の子どもや家族から、「日本の学校はイジメがあるから怖くて入りたくない」という意見をよく聞いた。学校に通うにあたっての不安要素が、日本人と全く同じであることが興味深い。学校を社会に置き換えれば、外国人にとって不安な社会は日本人にとっても不安であるという仮説が成り立つ。多様化・多文化化のなかで、人種や国籍を超えて個々を認め合うことの重要性がますます高まっている。

日本に移住する外国人のほとんどは、日本を第二の故郷と定め家族や周囲との日常を確立するため、仕事や生活に追われる毎日を過ごす。それは多くの日本人にとっての目的や生活そのものと重なる。少しでも豊かな日常を確立させたいと願う気持ちに、すでに国境は無くなっている。このような社会において自分「幸せ」を求めるとはどういうことなのか、一人一人が「自分」の内なる部分を探りながらキャリアを構築していく力が必要になってくる。

〈分科会の進め方〉

次のような内容を予定していますが、参加者の実情によって変更になる場合があります。

- 1) 「中学校教員の仕事」と題し、職務全般やあまり知られない現実などを紹介します。
- 2) 「外国人児童生徒教育のこれまで」と題し、教育現場の取り組みや課題を紹介します。
- 3) 日本に暮らす外国人の「生の声」を紹介し私たちの暮らす日本の客観視を試みます。
- 4) 学校における外国人児童生徒教育問題を社会全体の問題に置き換えて考察を試みます。
- 5) 多国籍化・多文化化が進むなかでのキャリア形成の在り方について討論します。

4. キーワードリスト

- 外国人児童生徒教育…対象範囲や支援期間等まだ基本的な共通認識が未だ不十分です。
- 多数派と少数派…学校でのイジメを始め社会問題の重要な要因の一つと考えられます。
- 多文化共生…この用語のスケールに惑わされず、個人が身近な接点に気づく力と動く力が大切です。

5. 参考資料等

- 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況に関する調査結果(文部科学省)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/_icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1332660_1.pdf
- 学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について(文部科学省)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1341903.htm

6. 事前予習資料

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 冊子「外国につながる子どもの教育—外国人児童生徒支援会議からのメッセージ」、宇都宮大学 HANDS プロジェクト、平成 26 年度 3 月 31 日発行

ジャパン・ブルー

☆講師プロフィール

氏名：日下田 正（ひげた ただし）

所属：日下田藍染工房代表

略歴：

1939年生まれ。織物作家柳悦孝氏（後に女子美術大学長）の内弟子として修行。父、博に藍染を学ぶ。1980年～1993年 東京銀座松坂屋美術画廊で、父、博との二人展を開催。1998年・2001年・2004年・2007年 栃木県さくら市鐵竹堂瀧澤記念館で、“日下田正織物展”を開催。2005年 栃木県無形文化財指定。現在、栃木県立宇都宮白楊高校非常勤講師。



1. 仕事の内容・研究テーマ

かつて私たち職人の仕事は、人々の日々の暮らしのために必要とされ、存在しておりました。産業革命以来、化学工業技術の飛躍的な進歩が、大量生産、大量消費の時代を招き、生活様式も大きく変化してまいりました。手仕事に携わる者には、難しい時代が続いております。

しかし、ウィリアム・モリスが提唱した「イギリス工芸運動」が、あるいは柳宗理、濱田庄治の「民芸運動」がそうであったように、私たちは、人間の手が物を創りだすことに深い意味を見出した先達者がたくさんいたことも考え、手仕事のもつ可能性を信じ、先人から伝えられ培ってきた技術を後世に伝えるべく努めてまいりたいと思います。ヨーロッパでは、現在でも“ジャパン・ブルー”と呼ばれ、高い評価を得ている日本の藍染の歴史、果たしてきた役割、現在の状況を見つめ、次世代における日本の藍染のあるべき姿を考えて行きたいと思います。

2. キャリアパス

高校卒業後、織物作家、柳悦孝氏（後に女子美術大学学長）に内弟子として入門を許され、4年間、手織物の修業。

帰郷後、父、博から藍染を学ぶ。

1980～1993 銀座松坂屋美術画廊で、父、博との二人展を開催

1992～現在 栃木県立宇都宮白楊高校非常勤講師として、「織物」の授業を担当

2001 栃木県立美術館主催 “千年の扉” 展出品

2005 栃木県無形文化財指定

3. 分科会の内容

先ず、200年、9代続く藍染屋（紺屋）の仕事場の作業風景を映像で見ることから、分科会を始めたいと思います。次からは、出来るだけ、映像、写真を使用せず、本物の色、本物の布、本物の資料を揃え、それを直視し、それに触り、藍染とは何であるか、ジャパン・ブルーとは何であるかを理解して行きたいと思います。

藍は、世界の歴史においても、さまざまな民族の間で用いられ、彼らの衣服を彩ってきた

植物染料です。そんな中でも、日本の藍染めは、世界から「ジャパン・ブルー」や「広重ブルー」と呼ばれ、賞賛されてきました。

現代でも日本の藍染に酔せられる外国人は少なくないようです。過去に、イギリスのロンドン大学の学生や、アメリカの美術大学で工芸を学び、藍染を学びたいという外国人学生を教えた経験もあります。

以前卒業した教え子が織り上げた布がニューヨークで活躍するファッションデザイナー、アナ・スイの目に留まり、ファッションショーでも用いられ、ショーの載っているニューヨーク・タイムズの英字新聞をもって、私を訪ねてきてくれたこともあります。東京では、やはり卒業生が自分のブランドを立ち上げたと聞きました。若者達が頑張っって自分の世界を確立していくことを願うばかりです。

私の海外での経験としては、以前、展覧会のリサーチを行う目的で、イギリス南西部の美術館を訪ね歩いたことがあります。又、フランスの一般の方々に日本の草木染を紹介する機会にも恵まれました。モヒカン刈りの高校生が草木染の色を「やさしい色」と表現してくれたり、老婦人が藍の濃淡のグラデーションの布を見て、「このジャパン・ブルーをフランスに置いてきなさい」と言ってくれたりもしました。

物づくりの世界、職人の世界で長年生きてきた私ですが、藍染を通して、海外で経験し、感じたこと、外から見た日本についてお話し、グローバル化の波の中で、グローバルの双方向(内から外および外から内)で、改めて日本について捉え直す機会になればと思います。

4. キーワードリスト

手仕事、産業革命、イギリス工芸運動、民芸運動、ジャパン・ブルー、天然染料

5. 参考資料等

- VEGETABLE DYES by Ethel M. Mairet
- 植物染色 エセル・メレ 寺村祐子訳 慶應義塾大学出版株式会社
- アーツ・アンド・クラフツと日本 デザイン史フォーラム編 思文閣出版
- イギリス工芸運動と濱田庄司展図録 イギリス工芸運動と濱田庄司展実行委員会
- 日本草木染譜 山崎斌著 染織と生活社

6. 事前予習資料

(<http://www.kokusai.utsunomiya-u.ac.jp/career-program/>からダウンロード可)

- 下野国・益子 紺屋の200年 9代目の50年
- 特別寄稿2 続 藍染を後世に 日下田正
- 特別寄稿4 藍染を後世に 日下田正
- SIA SIGO ニッポンの職人力に出会う旅 第16話 ここは藍の国 山田玲司

**2014年度国際キャリア開発プログラム「合宿セミナー」
「国際キャリア開発」事前学習資料集**

発行日：2014年7月1日

発行：宇都宮大学国際学部

〒321-8505 宇都宮市峰町 350

TEL: 028(649)5172 FAX: 028(649)5171

E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

		大学		学部		学科
学年		学生番号		氏名		